

クリタマバチ

○被害と発生生態

クリの新芽に虫こぶを作る害虫で、国内では岡山県で初めて確認され、その後全国に発生が拡大した。クリの展葉が始まる頃に虫に寄生された芽が肥大し、緑色の光沢のある虫こぶが形成され、その後赤色となる。虫こぶが形成された芽は伸張せず、成虫の脱出後に枯死する。抵抗性をもたない品種では、抵抗性品種に比べ虫こぶが大きくたくさん形成される。

年1回の発生で、雌だけで単為生殖を行う。成虫は6月中旬～7月上旬に虫こぶから脱出し、新梢の芽に産卵する。ふ化した幼虫は芽の成長点などに食入して加害するが、秋～冬はほとんど発育せず幼虫態で越冬する。幼虫は乳白色で1個の虫こぶに1～10頭以上の幼虫が寄生する。翌年4月頃から発育が進み、肥大した虫こぶ内を食べながら蛹化する。

虫こぶのできた芽は枝葉の伸張や開花結実が阻害され、減収につながる。

○防除方法

(ア) 生物的防除

- ・中国から天敵寄生蜂のチュウゴクオナガコバチが全国各地に導入され、山口県においても定着し、被害の発生は減少している。

(イ) 耕種的防除法

- ・間伐、整枝、剪定を適正に行い、樹勢の維持強化を図る。
- ・適正な肥培管理を行い樹勢を維持する。
- ・天敵（チュウゴクオナガコバチ等）保護のため、4月末まで剪定くずの処分は行わない。
- ・抵抗性品種を栽培する。

(ウ) 薬剤防除

- ・3月下旬～5月の薬剤散布は天敵（チュウゴクオナガコバチ等）に影響するため行わない。
- ・6月下旬～7月上旬の成虫の羽化・脱出期が防除適期となるので、この時期に薬剤散布を行う。



新芽に形成された虫こぶ



肥大した虫こぶ